

実践英語発音教育論 ——日本語音との比較を通して——

山 口 隆 一

要 旨

私の学生の中には将来、英語教員や英語を使う職業につきたいという希望を持っている者が多い。彼らはネイティブ・スピーカーの発音練習や英会話の授業を受けているにもかかわらず、実際の英語音が出ていない。なぜそういうことになるのか？私はその理由を次のように考えた。彼らの中には日本語の音の体系が既にでき上がってしまった。そのため彼らが実際の英語音を聞いても、それを再生する時、その音に近い日本語音を当てている。これが私の立てた仮説である。もしそうなら英語音を日本語音と比較して、英語の発音の仕方を逆に日本語の発音の仕方を通して説明するのが日本人にとって英語音を習得する最短コースではないだろうか。こういう考え方に立って書かれたのがこの article である。文学専攻の私が、専門分野でもない音声学の分野に踏み込んで、ただ学生のためという大義名分のもとに、なり振り構わず何でもありで、門外漢にしかできないアカデリズムや方法論の無視も意に介さずに書き上げた。学生の役に立つことを切に願っている。

内容は、まず英語全般について英語と日本語との根本的な相違、即ち、1. 発声の仕方、2. 言葉のリズム、3. 音節構成、の相違を指摘した。次に、個別の発音については、日本人が正しく発音できていると思っている英語音で、実は英語国民からすると変に聞こえるもの、さらに日本語音にはない英語音で、日本人にとっては特別の練習が必要なものを取り上げた。それらを日本語音と比較して、日本語音の側から音の出し方を説明した。

BBC はかなり理解できるが、CNN は聞き取りにくいという日本人が多い。これはアメリカ英語に日本語音にないものが多いからである。そのため、この article では特にアメリカ音に注目した。

キーワード：英語発音教育、英語日本語発音比較、英語音声学、英語教育

はじめに

私が担当している学生の中には将来中学、高校の教師になりたいとか、空港、航空関係、旅行業などで働きたい、そのために英語は頑張っていると言う者がかなりいる。彼らの英語を聞いてみると、これでは通じないだろうというカタカナ英語の場合が多い。英語の発音以前に、まず英語の声の出し方が分っていない。日本語はのどから声を出す、英語は腹から声を出す。オペラ歌手になったつもりで、横隔膜（ダイアフラム）に力を入れて声を出せ。これが日本語は pitch accent, 英語は stress accent といわれるものの正体だ、というのが私のまず第一声である。

その次が、英語には特有のリズムがある。英語を読む時には、「弱強、弱強」のリズムで読め。つまり自分はジャズ・ミュージシャンになったと思え、というのが私の第二声だ。(クラスによっては少しカッコをつけて、シェイクスピアの作品はアイアンピック・ペンタミターという韻律で書かれている。たとえば『ハムレット』の第三独白“To be, or not to be: that is the question”などまさに弱強五歩格。これはシェイクスピアさんが英語の法則を本能的に看破していたからだなどと、クサイ術学で学生を煙に巻くこともある。)

その次に、英語の音節(音の単位)と日本語の音節とがまったく違うことに注意を払え。たとえば、“street”, 日本語では「ストリート」と五音節になるが、英語では一音節だから、一度手をたたき間に発音しなければならない。“quick”「クイック」も日本語では(glottal stopをいれて)四音節だが、英語では一音節で発音しなければならない、というのが私の第三声である。

これら英語を商売の道具にしたいという学生に、どうしたら最短の期間で、最低合格線の英語発音を身につけさせることができるだろうか、というのが私の問題意識である。

私は、学生が英語の発音ができないのは、英語音を日本語音の体系の中に取り入れて、英語音に近い日本語音に置き換えて再生しているからだろうと推測した。(中には彼らの人生でより早く遭遇したローマ字が英語だと無意識に勘違いしている者もいる。こういう者は“faint”を「ファイント」などと平気で読む。)

もし学生が英語音を日本語音で考えているのなら、それなら逆に英語の音を日本語の音で説明したら彼らはすぐ理解できるはずだ、というのが私の仮説である。つまり英語音と日本語音を比較して、その違いを説明して、練習させるという方法である。この教え方は邪道かも知れないが、まず私は音声学の専門家ではないし(私の関心はフォークナーやシェイクスピアなど文学である。), その上、今教えている学生の声で、将来空港の出発便案内をされたくない。今の内に最低限通じる英語にしておいてやらないと、という願いで私の英語発音の教え方をまとめたものが、このマニュアルである。要は、英語音を、日本語音

を使ってどううまく説明するかというところがこのマニュアルのポイントである。(これは音声学の教科書ではないので、体系的に記述するものでもないし、またすべての英語音を説明するものでもない。日本人学生にとって重要だと思われるものを取り上げる。)

なお、私が基準にしているのは米音で、それも東部や南部ではなく、中西部、西部のいわゆる典型的な American English を意識している。

母音

1. [æ] これは日本語の母音で間に合わせてはいけない音。日本語の「エ」と「ア」を同時に発音する。だから“can't”は「キャント」ではなく、「ケアント」，“canon”は「キャノン」ではなく、「ケアヌン」である。

練習 bat, rat, gas, can, hat, man, add, bad, nap, laugh (米音), rabbit, bath (米音), apple

2. [ɑ:] 日本語の「ア」より大きい口を開け、のどの奥に力をいれ (ちょうど日本語の「オ」を出す時に力を入れるところに力を入れ)、「アー」という感じ。

練習 bar, hard, garden, far, part, farm, ark, star (これらの単語はアメリカ音では [r] の音があとに続く。) [ɑ:] は日本人の耳には「ア」というよりもいくぶん「オ」のような音に聞こえる。(口の大きさは日本語の「オ」の大きさではなく、日本語の「ア」よりも大きい、使われている部位がのどであるため。) また [r] の音があとに続かない [ɑ:] の音はイギリス音にあるのみで、アメリカ音では [æ] の音になる。例えば“fast”はイギリス音では [fɑ:st], アメリカ音では [fæst], 同様に“cast”はイギリス音で [kɑ:st], アメリカ音で [kæst], “bath”はイギリス音で [bɑ:θ], アメリカ音では [bæθ], “banana”はイギリス音で [bənɑ:nə], アメリカ音で [bənæné] となる。(ただアメリカでも歴史的にイギリス志向の強かったコネティカット州やマサチューセッツ州など東部の州と南部 (の特に老人の間) ではイギリス音が使われ, [r] も発音されないし, [æ] ではなく [ɑ:] のままである。)

3. [ɔ] この音は日本語の「ア」に近い。「ア」の大きさの口を開けて、のどの奥、つまり日本語の「オ」を発音するときを使う部分に力を入れる。イギリス音は日本語の「オ」とほとんど同じであるが、アメリカ音は日本語の「ア」に近い。

練習 hot, shop, odd, olive, not, pocket, pot, watch, coffee, shot

4. [ɔ:] この音はたいていの日本人が、自分ではちゃんと出ていると思っていながら、アメリカ人などが聞くと、正確に出ていない音である。すなわち、上述の [ɔ] を伸ばしたものであるが、日本人の癖として自然に [ou] という二重母音になってしまう。

たとえば、“saw”は[sɔ:] [ソー]であるが、日本語の癖で自然と“sow”[sou] [ソウ]という音になってしまうので要注意の音である。

練習 all, fall, law, always, draw, straw, sauce, ought, flaw, sausage, thought, brought, fought, naughty, walk, autumn, thaw

5. [ou] この音は日本語の中にあるので、(特にアメリカ音は) われわれ日本人には自然に出せる。まったく問題はない。

練習 (する必要もないが,) go, toe, note, roll, low, beau, oak, home, both, own, hole, woke, coal, old, boat, coat, goat, host

6. [i] この音は日本語の「イ」ではない。日本語でいうと「イ」と「エ」の中間の音。つまり東北弁の「イ」を出せばよい。

練習 it, is, if, lip, hip, big, city, bit, give, did, live, sit, pick, busy, women
(〔注意〕 “think”, “king”, “pink” のように、後ろに [ŋ] の音が続く場合、[i] の音が、日本語の「イ」の音になる〈限りなく近づく〉。)

7. [i:] この音は日本語の「イ」の音を伸ばせばよい。(つまり英語の発音記号の [i] の音と [i:] の音は同じ発音記号を使って標記されているが、そもそもまったく違う音である。)

練習 key, green, people, east, neat, sheep, tea, bean, seat, beat, heat, peak, deed, ease, leave, need, meet, seed

(※ [i] と [i:] の発音の区別は日本人にとって非常に重要なことであるが、単語のなかにはどちらの音でもよいものもある。たとえば、“creek”は [kri:k] と発音する人もいるし、[krik] と発音する人もいる。)

8. [u] この音はだいたい日本語の「ウ」の音でよいが、舌に力を入れない。そのため“cook”が「コック」、 “hook”が「ホック」といくぶん「オ」のように聞こえる。

練習 book, foot, good, nook, look, wood, wool, full, put, hood, pull

9. [u:] この音は唇をやや突き出して「ウー」という感じ。舌に力を入れる。[i], [i:] の場合と同じように、[u], [u:] は同じ発音記号が使われているが、実際にはまったく違う音である。[u] を伸ばして発音すれば [u:] になるというものではない。

練習 boot, food, mood, cool, shoe, fool, pool, Luke

(※ ただし、アメリカ英語の中には [u] でも [u:] でもどちらでもよいものがある。たとえば次の語など。room, roof, hoof 〈単数の場合 [huf], 複数の場合 [hu:vz] と発音する人が多いようである。〉)

10. [ɔr] (または [ə:] で表される音) この音は典型的なアメリカ音。(イギリス音は [ə:]

で、口の大きさは同じだけれど、巻き舌にはならない。) 口を日本語の [ウ] の大きさに開ける。舌を巻く。そして「アー」と息を出す。

練習 work, word, girl, bird, firm, term, early, learn, earth, occur, stir, first, journey, courage, worry, curry, hurry, earn, murmur

11. [ɑr] この音は2. で説明した [ɑ:] の後半の長音記号の部分を10. の [ər] に替える。[ɑ:] はスペリングに“r” が入っているかぎり、アメリカ音ではすべて [ɑr] になる。[ɑ] の部分が少し日本語の「オ」のような音に聞こえることに注意。

練習 bar, hard, garden, far, part, star, are, heart, cart

12. [ʌ] 日本語の「ア」より小さい口(「ウ」より大きい口)を開けて、短く「ア」と発音する。(アメリカ音では多くの場合、[ə] の音になる。)

練習 love, much, mud, ultra, ugly, puppy, under, duck

13. [ə] アクセントのある場合。日本語音では [ウ] の大きさに口を開けて [ア] と発音する。

練習 (アメリカ音の) love, mud, bug, rug, truck, luck, tug, fun, sun

14. [ə] アクセントのない場合。この音は正しく理解されていない場合が多い。「ア」と発音すると考えている人が多いが、それは間違い。today [tədeɪ] は [タデイ] ではない。[ə] はここにアクセントのない音節が一つありますよ、というだけのしるしである。だから、stationは「ステイション」ではなく、「ステイシュン」、canonは [キャン]ではなく、「ケアン」である。ただ正しく発音されないからといってあまり実害はない。

15. [æu] アメリカ音では“how”や“out”など本来 [au] になるところが(特に中西部や西部では) [æu] と発音されることが多い。特に練習するほどのものではないが、知っておくと便利。

** その他の母音は日本語と特に変わっているわけではなく、日本人に出しにくい音はないので実践的発音練習という意味でここでは取り上げない。

半母音 私は音声学者ではないので、英語のどの音が半母音として公式に認められているのか知らない。また半母音と認定するために、どのように音節を計測するのも知らない。一般には [w], [j], [r], などが半母音と考えられているようであるが、[r] は子音のところで取り上げたい。そのほかに私はいわゆる“dark l” [ɫ] といわれる“l”の音も半母音だと考えている。(多分 [m] の音も語尾にくるものは半母音と考えてもいいのではないかと私は思っている。なぜなら母音こそ付かないが、かなり長い音に

なることが多い。) 私の目的は日本語の音の体系を利用して英語音を説明して、練習できるようにすることにあるので、実際の音の出し方を記述する。

16. [j] この音は日本語のヤ行の音である。ya, yi, yu, ye, yo のうち、今の日本語では yi と ye は発音しない。ye は比較的出しやすいが、yi が出しにくい。ya, yi, yu, ye, yo; ya, yi, yu, ye, yo と何回か練習してから、次の単語で練習するとやりやすい。

練習 yeast, year, yield, yet, yes, yell, yellow, yearn, unite, Europe, tune, few, huge, human, amuse, value, yeoman, yonder, Yankee

対比練習 日本語のア行を使う単語と、ヤ行を使う単語を対比して練習する。

east vs. yeast, ear vs. year, eel vs. yield, el vs. yell

17. [w] この音は日本語の「ウ」とは全然違う音。上下の唇を尖らせておいて、瞬間的に破裂させる。(私が学生時代に発音を習った教師で、この音を「肛門型」と表現した人がいたが、私はそんな下品な表現はいくら正しくても、絶対に使わない。)

練習 wind, wood, weep, wound, wet, wool (“wool” の母音は短い方の [u] で、長母音の [u:] ではない。) wander (第1音節の母音は [ɔ]), wonder, one, won (これら3語の(第1音節の)母音は [ʌ] であるが、発音の仕方は日本語の「ア」より小さい口(「ウ」より大きい口)を開けて、短く「ア」と発音する。アメリカ音では [ə] の音になる。)

[w] の音の練習の続き well, swim, what, why, quick, quit, with, anyone, wit, wear, wine

18. [ɫ] この音は dark l と呼ばれる音で、full consonant の [l] ではない。単語の語尾やアクセントのないところに現れる。「アンビリーバボー」というTV番組があるが、最後の「ボー」の部分。音の出し方は、[l] の方向に舌が動き、その途中で止まる。実際には日本語の「ウ」の音とほとんど同じ音である。

練習 full, file, pill, bill, hill, doll, dull, eel, pool, apple, school, bubble, believable

子音 英語の子音といえば、日本語にはない“th”の音などから説明するのが常套であるが、ここでは日本人が完全に発音できていると信じている音で、実はアメリカ人が聞くと(イギリス人も含まれる場合もある)変な音に聞こえるケースの説明から始めたい。たとえば [ɫ] の音など。

19. 基本的な [t] の音(あたりまえの [t] の音) 英語の [t] の音は日本語のタ行の音とはかなり異なる。(映画などを見ていると、フランス語の [t] の音は日本語の [t]

の音に似ているな、と私は感じている。) 英語の基本的な [t] の音と日本語の [t] の音の出し方の違いは、まず舌の当るところが違う。日本語の [t] の音は歯の裏に舌を当てるが、英語の [t] はもう少し後方、歯ぐきより後ろに舌を当てる。(ミュージシャンの中に英語の [t] の音を日本語の歌を歌う時に使っている人がいる。クワタ・ケイスケだったか?) もう一つ重要な違いは、英語の基本的な [t] の音には、犬が全力疾走したあと、舌を出して「ハー、ハー」と息をする、あの息の音を一緒に出さなければならない。(この「息の音」もフランス語の [t] の音には入っていない。) だから “top” という英語を発音する時には、われわれ日本人は「トホップ」を速く一音節で発音する感じになる。

練習 tank, tip, top, tick, till, tap, tool, ticket, time, tale (tail), Thames, tear, tore, tall

これらの発音を日本語音で考えると、音節の数に注意しながら、(1音節は手を1回たたく間に出す音), tank 「テハंक」(音節数1), tip 「ティヒップ」(音節数1), top 「トホップ」, または「タハップ」(音節数1), tick 「ティヒック」(音節数1), till 「ティヒウ」(音節数1), tap 「テハップ」(音節数1), tool 「トゥフウウ」(音節数1), ticket 「ティヒケット」(音節数2), time 「タハイム」(音節数1), tale (tail) 「テハイウ」(音節数1), Thames 「テヘムズ」(音節数1), tear 「テヘア, または, ティヒア」(音節数1), tore 「トホア」(音節数1), tall 「トホオウ」(音節数1) という感じで発音を意識する必要がある。

※ ところが、この氣息音はある環境、すなわち st-cluster と呼ばれる単語では出ないという例外的なケースがある。“student” や “stand” や “strategy” のように、[t] の音の前に [s] の音がくると、「ハー、ハー」音は付かない。もともと日本語のタ行の音に氣息音は付いていないので、これはわれわれには問題はない。むしろ氣息音を付ける練習の方がむづかしい。

対比練習 tick vs. stick, till vs. still, top vs. stop, tile vs. style, tear vs. stare (stair), tool vs. stool, tan vs. stand, taste vs. state, Tate vs. stay, tore vs. store, tub vs. study, tuck vs. stuck, timid vs. stimulate

20. なんだかおかしい [t] の音 CNN のニュースを聞いていると「イヌレスティング」とか「インヌネアシュヌー・エアポート」など “interesting”, “international airport” のもとの [t] の音はどこにいったのよ、と言いたくなるものがある。アメリカ人で “center” を「セ(ン)ナー」と、“twenty” を「トゥウェニー」と発音するのはごく普通である。そのほかには、アメリカでTVを見ていると、General Motors のコマーシャ

ルで、Pontiac という車種の宣伝が、われわれ日本人には「パニアック」と聞こえるのもこのためである。練習するほどのこともないが、聞き取りのために知っておくと便利。

21. 不発の [t] の音 “ly” の前にくる [t] の音である。[t] の音は普通はハジクが(破裂音)、これははじかないで、止めてしまう音。日本人には練習が必要。

練習 lightly, stately, apparently, nightly, definitely, delicately, minutely, absolutely, approximately

[※ [t] の音(あたりまえの [t] の音)の二人の兄弟が [p] の音と [k] の音である。なぜ兄弟かという点、[t], [p], [k] は、同じように「はじく音」(破裂音)で、しかも「声が出ない音」(無声音-声帯を使わない音)だからである。]

22. [p] この音の出し方は日本語のパピブペポと同じでむつかしくはない。ただ、日本語とちがうところは、「ハー、ハー」音(氣息音)と一緒に発音される場所。すなわち、“pick” は極端に言うと、一息で「ピヒック」と発音するような感じになる。

練習 pat, pin, pan, port, pit, pun, peak, peck, pill, pace, people, poop, pee

これらの発音を無理を承知で日本語で説明すると、必ず一音節(手を1回たたく間に出す音)で、pat「ペハット」、pin「ピヒン」、pan「ペハンヌ」、port「ポホオト」、pit「ピヒット」、pun「プハン」、peak「ピヒイク」、peck「ペヘック」、pill「ピヒウ」、pace「ペヘイス」、people「ピヒイブウ」、poop「プフウプ」、pee「ピヒイ」という感じで発音する。

※ しかし、[t] の音と同じように sp-cluster ([p] の音の前に [s] の音がある場合)の単語には氣息音は付かない。

対比練習 pat vs. spat, pin vs. spin, pan vs. span, port vs. sport, pit vs. spit, pun vs. spun, peak vs. speak, peck vs. speck, pill vs. spill, pace vs. space
pie vs. spy

23. [k] この音も出し方は日本語と同じで、特にむつかしくはない。日本語よりすこし力を入れ気味に出すとよい。ただ、[t], [p] の場合と同じように、氣息音が付くので、“kick” は極端に言うと、一息で「キヒック」と発音するような感じになる。

練習 cat, cab, candle, kit, kill, kid, Kate, cut, cute, kind, camp, coop, cool, cope, core, cow, care

これらの発音を無理を承知で日本語で説明すると、必ず一音節(手を1回たたく間に出す音)で、cat「ケハット」、cab「ケハップ」、candle「ケハンドウ」、kit「キヒット」、

kill 「キヒウ」, kid 「キヒッド」, Kate 「ケヘイト」, cut 「カハット」, cute 「キュフウト」, kind 「カハインド」, camp 「ケハムプ」, coop 「クフウプ」, cool 「クフウウ」, cope 「コホウプ」, core 「ココア」, cow 「ケハウ」, care 「ケヘア」という感じになるが、注意を喚起するために少しオーバーな記述になっている。是非ともネイティブ・スピーカーの出す音に注意してほしい。

※ また、同じように sk-cluster の場合は氣息音が見つからない。

対比練習 cat vs. scat, cab vs. scab, candle vs. scandal, kit vs. skit, kid vs. skid, kill vs. skill, cool vs. school, cope vs. scope, care vs. scare, Kate vs. skate, kin vs. skin, can vs. scan, cream vs. scream, coop vs. scoop, core vs. score

24. 不発の [t], [p], [k] あたりまえの [t], [p], [k] の音は破裂音と呼ばれて「はじく音」であるが、アメリカ英語にはこれらの音が不発の場合がある。21. で説明した「不発の [t] の音」と同じように [p], [k] にも不発の音が、特に単語の末尾で起こる。つまりそれぞれ [t], [p], [k] の発音をするために口が動くのだが、最後の破裂をしない。そのためわれわれ日本人には非常に聞き取りにくい。すなわち、〈“pep”, “pet”, “peck”〉; 〈“pip”, “pit”, “pick”〉; 〈“pup”, “putt”, “puck”〉などは最後の音を破裂しないために、日本人にはほとんど同じに聞こえ、区別しにくいことがある。

[※ [t], [p], [k] には [d], [b], [g] という三人のいところがある。なぜいところかというと、それぞれ対応する音と同じ部位を使って発音し、もとの三人と同じように破裂音であるが、違いは「声帯を使って声を出す音」、すなわち有声音だからである。]

25. [d] この音と日本語のダ行の音のちがいは、[t] の場合と同じように舌があたる上あごの場所が英語の方が日本語より後方だということである。それから無声音の [t], [p], [k] とは異なって、「ハー、ハー」音（氣息音）は付かない。
26. [b] 日本語の音とまったく同じで、問題なし。氣息音は見つからない。（この音の前に [m] の音がくると、アメリカ音では [b] がとぶ（消える）ことがある。たとえば、“combination” が “com-mination” すなわち [kəm-mineɪʃən]（「カンミ・ネイション」）と発音されることがある。）
27. [g] 日本語の音とほとんど同じ。やや日本語よりも力をいれて発音する。氣息音は見つからない。
28. [ɪ] 今ではこの音を出せる日本人は多い。しかし出しにくい音ではある。上あごに舌が当たるところは音声学的には日本語も英語も同じところなのだが、日本人の場合

そこに (alveolar ridge) 舌をあてると、一回ハジク習性がある。つまり日本語の「ラリルレロ」の音になってしまう。するとそれは [l] の音ではなく、アメリカ音の [t] の変種、または [d] の変種になってしまう。(つまり、“water”, “butter”, “better”, “city”, “a lot of” などの [t] の音や、“muddy”, “goody”, “giddy” などの [d] の音になってしまう。) そこで、音声学的には誤りであるが、日本人にとって英語の [l] の音を出すコツは、歯の裏に舌をべったりつけて発音することである。すると英語の [l] の音と同じ音が出る。私はこの方法が日本人には一番やりやすいと考えている。

練習 lap, land, lake, clean, late, climb, class, lag, play, lip, lick, let, lead, lot, look, loop, light, long, lie, lay, like, black, blame, plenty

29. [r] この音は [ər] (または [ə:] で表される音) の音を出す時のように、まず舌を巻く。それを前方に巻きをはずしながら発音するが、舌が上あごについてはいけない。(これが日本人には意外とむつかしい。舌が上あごにつかないと、母音になってしまうような気がして落ち着かない。しかしそれを我慢して、発音する練習をすることが大事である。はじめのうちは、発音する前に日本語の「ウ」の音を付けて練習するとよい。「ウ」がついたままでも英語の音としては acceptable であるから、かなりうまくなってから [ウ] をとればよい。(アイルランドやスコットランド人などは、[r] の音をべらんめい調の、日本語の「ラ」を二回ハジクような発音をする人がいるが、どうしても正調 [r] を出せない場合は日本語の「ラ行」よりは通じやすいかも知れない。)

練習 rat, rich, ring, right, rent, room, roof, rain, road, wrong

対比練習 light vs. right, left vs. reft, lent vs. rent, link vs. rink, lain (lane) vs. rain, long vs. wrong, lip vs. rip, late vs. rate, lock vs. rock, leaf vs. reef, load vs. road, lie vs. rye, look vs. rook

30. [n] この音は日本人がちゃんと発音できていると思っているが、実は正確には出していない音の一つである。日本語の「ン」は、舌がどこにもつかないが、英語の [n] は舌が必ず上あごの、日本語でいうと「ナ」行のところにつかなければならない。その結果、“unko” というスペリングを英語国民が発音すると「ウヌコ」となる。私は学生が [n] を発音しそこなって、日本語の「ン」で間に合わせている時には、必ず「ウヌコ」の [n] の音が出ていないよ、と注意を促すことにしている。

練習 sin, son (sun), fine, one, fun, plan, plain (plane), train

これらの発音をカタカナで表記しようとするれば、sin 「スインヌ」、son (sun) 「サンヌ」、fine 「ファインヌ」、one 「ウンヌ」、fun 「ファンヌ」、plan 「プレアンヌ」、plain (plane)

「プレインヌ」, train 「チュレインヌ」となる。

31. [ŋ] それでは日本語の「ン」の音は英語にないのかというと、ちゃんとある。それはスペリングでいうと“---ng”で、発音記号では [ŋ] で表される音である。たとえば“kingdom”など。もし英語国民に「うんこ」と発音させたいなら、“ungko”とスペラなければならない。

練習 kingdom, songbird, King Kong, Hong Kong, strongly

32. [s] この音は日本語の「サ」行の音だから、日本人には出しやすい。ただ、日本語の「シ」は変則なので、[si] は一息に「スイ」と発音しなければならない。日本人が“sit”という語を発音する時に、「シット」と発音すると英語国民には“shit”と聞こえるので、要注意。

練習 sip, sit, system, sister, simulate, city, silver, sympathy, sing

33. [ʃ] この音は日本語でいうと、「シャ、シ、シュ、シェ、ショ」の音であるが、実際にはもう少し深い音である。深い音を出すためには唇を少し突き出すとよい。

練習 she, shine, shock, show, shut, sure, machine, nation, shovel

[※ [s], [ʃ] のいとこの音が、[z], [ʒ] である。つまり発音の仕方がまったく同じで、ちがいは [s], [ʃ] が無声音（声帯を使わない音）であるのに反して、[z], [ʒ] は有声音（声帯を使う音）である。]

34. [z] 日本語の「ザ、ズィ、ズ、ゼ、ゾ」であるから、「ズィ」以外は簡単に発音できる。（[z] 自体は子音だから、日本語のように母音をつけて発音してはいけない。）

練習 zip, zinc, zone, zigzag, zebra, easy, lazy, crazy, chimpanzee

35. [ʒ] 日本語の音でいうと、「ジャ、ジ、ジュ、ジェ、ジョ」（すなわち「シ」の濁音で、「チ」の濁音ではない。）になる。ただ日本人は、[dʒ] の音（日本語では「ヂ」に当る音）と区別しないで、ごちゃ混ぜにしているから要注意。たとえば，“judge”，“Japan”，“jump”などはこの ([ʒ]) の音ではない。

練習 measure, treasure, vision, mirage, collision, decision, pleasure,

36. [ts] この音は日本語の「ツ」の音だから、日本人には発音しやすい。（ただし日本語のように母音を付けて発音してはいけない。）

練習 bats, wants, hits, waltz, bets, quarts

※ しかし有声音の「ツ」になったとき、「ズ」と区別して発音することに注意が必要である。

37. [dz] この音は [ts] の有声音で、日本語では「ヅ」の音である。しかし現在の日本語では、「ズ」[z] の音とごちゃ混ぜになっているので注意する必要がある。発音の

コツは「ツ」と発音するつもりで、濁れば出せる。

練習 seeds, friends, wards, needs, kids, foods, kinds, minds

対比練習 seeds vs. sees, wards vs. wars, needs vs. knees, kids vs. keys, minds vs. mines (この対比練習は「破擦音 vs 摩擦音」なのである。)

38. [tʃ] この音は日本語の「チ」の音であるから、われわれ日本人には発音しやすい。(もちろん「チ」から母音を取った音である。)

練習 church, chip, chunk, chicken, choose, choice, cheap, chap

※ しかし有声音の「ヂ」([dʒ])になった時、「ジ」([ʒ])と区別する必要がある。

39. [dʒ] 日本語の「チ」の音を濁らせた音であるが、学生は往々にして「シ」を濁らせた音で発音する。“Japan”は「ジャパン」ではなく、「ヂャパン」でなければならない。

練習 Japan, judge, jump, image, major, grudge, orange, juice, ledger

対比練習 major vs. measure, ledger vs. leisure, journey vs. pleasure (この対比練習も「破擦音 vs 摩擦音」なのである。)

40. [θ] この音の出し方はよく知られている。しかしいつも必ず正確に出す人は少ない。よく練習して習慣をつけてしまうことが大事である。さて、出し方は「上と下の歯で舌を噛む」という説明がよくされる。あるいは、「舌の先を上歯に当てて、摩擦させて音を出す」。無声音である。

練習 think, thing, thank, throat, thrift, bath, through, mouth, month

41. [ð] [θ]の有声音が[ð]である。これも出し方は知っているが習慣化していない人が多い。場合によっては、“th”が消えることがある。たとえば、“in that case”は[in næt keɪs] [イ(ン)ネアツ(ト)ケイス]、“in this town”は[in nis taʊn]「イ(ン)ニスタウンヌ」，“among them”は[amʌŋ nem]「アマンネム」，“see them”は[si:em]「スィーエム」となる。

練習 bathe, that, this, those, these, though, weather, than, then, leather

42. [f] いまでは殆どの日本人がこの音を簡単に出せる。歯で下唇を噛むと出るといわれているが、実際には下唇と上の前歯を摩擦するとよい。無声音である。

練習 fact, fix, fox, fat, friend, flip, float, flap, free, flu, Friday

43. [v] [f]の有声音である。出し方はまったく同じ。

練習 very, value, ever, vote, vow, valve, vitamin, veteran

44. “pro---”などの[p]の音。その他「無声音と子音プラス母音のcluster」、すなわち“cla---”, “sta---”, “tre---”など。例 “problem”, “class”, “state”, “trend”など。

たとえば、“problem”の[p]の音は日本語の「プ」と言えば間違いである。「プ」から母音をとったものでなければならない。“click”の[k]の音も、日本語の「ク」と言えば間違いである。[ク]から母音をとったものでなければならない。“train”の[t]の音も母音抜きで発音しなければならない。[s]の場合は(“sky”の場合のように)、日本語自身が無声音化していることが多いため、問題ない。

練習 problem, plan, plane, train, click, quick, quiet, trend, class, track, truck, treat, trip, trot

※ “please”が強められて日本語の「プフ」[pu]のような音で発音されることがある。それは活字では“puh-leeeeeze”と表記されるが、「そんなバカなことを言わないで、お願いだから。」(“Don’t say such a stupid thing.”; “Don’t make such a silly excuse.”; “Don’t expect me to believe that”)などという気持ちが言外に含まれている“puh-leeeeeze”=“please”である。

45. 同じことが、「有声音と子音+母音」にもいえる。すなわち“black”の[b]の音は日本語の[ブ]ではない。「ブ」から母音をとったものである。“great”の[g]も「グ」から母音をとったもの、“drink”の[d]も母音が付いてはいけない。(なお、“puzzle”や“sizzling”の[z]も「ズ」と言えば間違い。)

練習 blank, brand, blink, blame, drug, drain, drag, gross, glass, (dazzling)
要は、英語の「子音」と「音節」に特別の注意を払う必要があるということである。

46. [h] この音は日本語の「ハ」行の音よりも弱い。時によっては、殆ど発音されないこともある。たとえば、“in his case”は「インニズケイス」、 “on her dress”は「オンヌドウレス」と聞こえる。

おわりに ここまで私がやってきたことは、いわばヴァイオリンの音を言葉を用いて説明しようとするようなものである。英語の音を理解するためには、まず本物の音を聞くこと、すなわち、ネイティブ・スピーカーの音を聞き取ることである。しかしわれわれ日本人には既に日本語の音の体系ができ上がってしまっているために、これが言うほど簡単ではない。その時注意を払ってもらいたい英語の発音の特徴を指摘したのがこの article である。学生諸君の英語発音練習に少しでも役立てば幸いである。